



Title	オリンピックと遺産 : 『<オリンピックの遺産>の社会学』から
Author(s)	鬼丸, 正明
Citation	一橋大学スポーツ研究, 33: 133-134
Issue Date	2014-12-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/27077
Right	

IV. 研究会報告記録

1. オリンピックと遺産——『〈オリンピックの遺産〉の社会学』から——

鬼丸 正明

昨 2013 年、長野オリンピック検証の書が上梓された（石坂友司／松林秀樹編著『〈オリンピックの遺産〉の社会学——長野オリンピックとその後の十年』青弓社、2013 年。）。私はこの書の対象についても方法についても門外漢であるが、オリンピック開催の準備過程のただ中にある今日的重要性を考え、報告検討した。研究会においては序章から終章まで全 11 章を報告検討したが、本稿においては序章と終章のみ要約検討する。

筆者らは先ず「長野オリンピックが地域社会に何をもたらしたのか、残された正負の遺産と影響はどのようなものだろうか。」（石坂／松林、前掲書、7 頁。以下、同書からの引用は頁数のみ）を明らかにすることが本書の問題関心であるとし、序章（石坂友司／松林秀樹「オリンピックとスポーツ・メガイベントの社会学」）ではオリンピック開催後の地域変容と評価に焦点をあてる本書の方向性を明らかにすると述べる。

先行研究から筆者らは、準備・開催・開催後という時間軸を入れた実証研究そして、経済的指標のみならず無形の遺産にも目をむける研究の必要性を説く。そして筆者らは〈Legacy〉は価値中立的なもので肯定的にも否定的にも評価されうるものだが IOC は肯定的な側面のみ強調していると指摘し、「これら肯定的な評価に埋め尽くされた遺産〈Legacy〉という概念をそのまま引き受けるのではなく、それらが地域にとってどのような遺産(Heritage)であるかについて、常に批判的に捉え返し、相対化する視角を維持する必要がある。」

(22 頁)と説いて、最後にオリンピックの遺産を評価する概念図として次の三軸からなる概念図を

提起する。

(横軸) ——有形の遺産（競技場の建設やインフラ整備）と無形の遺産（ボランティアなどの社会関係資本やオリンピック開催の経験や記憶）

(縦軸) ——ポジティブ（プラス）とネガティブ（マイナス）

時間軸——準備／開催／開催後

この概念図を前提に、本書では第 1 章から第 9 章まで筆者らも含めて様々な論者による興味深い考察が行われている。それをふまえて終章（松林秀樹／石坂友司「誰にとってのオリンピック・遺産なのか」）で、筆者らは遺産についての議論において「ここで重要なのは、誰にとっての遺産なのか（誰がどのような評価を下すのか）、時間の経過によって評価に変化はあるのかといった視点を取り込むことである。」(191 頁)と指摘し、本書で明らかになった事実を概念図に埋め込んで遺産評価を行う。

〈長野オリンピックの遺産——その布置的連関〉

有形・ポジティブ

ここには交通インフラ（長野新幹線、上信越自動車道、オリンピック道路）といくつかの競技施設が入るとする。オリンピックに伴う交通インフラの整備が東京や名古屋・金沢などの周囲の要衝地への時短効果をもたらしたと指摘する。

有形・ネガティブ

ここには毎年高額な維持費が必要な競技場、必要性が高くない交通インフラ、宿泊業が入るとする。今日でも競技施設の施設維持費、補修・改修費が市の財政に大きな負担となっており、長野市の借入金はいまだに1,000億を超えていると指摘する。そして白馬村、山ノ内町では開催後、宿泊業の倒産・廃業が相次いだとする。

無形・ポジティブ

ここにはボランティア活動・組織の醸成、知名度の上昇、国際交流、生活圏の変化が入るとする。エムウェーブ友の会や「一校一国運動」など開催後も継続しているボランティア活動、国際交流の例を挙げている。また交通インフラの整備による生活圏が変化した地域として軽井沢町、御代田町を挙げ両町では人口や観光客が増加したとする。

無形・ネガティブ

ここでは生活圏の変化による地域の衰退、ボランティアの衰退が入るとする。交通インフラの整備による利便性の向上とともに、人口流出や、産業構造の変化も発生し、白馬村のスキー場は道路の整備で日帰り圏となり宿泊客が減少したと指摘し、交通網の恩恵は地域で異なるとする。またボランティア活動については後継者不足が指摘されている。

最後に筆者らは、遺産の評価は主体を変えればどちらにでも転化しうるものであり、時間の経過が評価を変えることもあるとする。遺産のポジティブな側面だけ強調したり、ネガティブな側面だけ強調してはならないと述べ、「誰にとってのオリンピックであり遺産であるのか、時間の経過にもなって位置付けが変わったのか／変わっていないのかが問われなければならないのである。」

(197頁)と説く。

本書で提示された、開催後の遺産を検証すべきだとする筆者らの問題関心は極めて重要なもので

ある。とりわけこれから東京オリンピックの準備が行われる時に、開催後の視点を提起することは理論的にも実践的にも貴重である。そして筆者らの、誰のための遺産なのかを問う視点、時間軸に沿って検証する視点、地域ごとに検証する視点は重要な視点といえる。

但し幾つか疑問に思ったこともある。その一つは「遺産」概念の定義であり、概念があまりにも多義的に過ぎる点である。中でも「有形」－「無形」の分類は疑問で、知名度、社会関係資本、生活圏を「無形遺産」にくくるのは無理があるのではないかと思う。これはIOCの「遺産」概念を批判的に検討しようとする筆者らの戦略的選択だと思われるが、これからの研究の蓄積のためには別の、あるいはもっと細かな分類が必要となるのではないか。二つ目は、筆者らの「誰のための遺産なのか(誰がどのような評価を下すのか)」という主体を問う視点は重要なものと考えるが、この視点が概念図に反映されていないのはなぜなのか、理解できなかった点である。

このような疑問はあったが、本書は先行研究や資料の蓄積の少なさのなか丹念で丁寧な考察がなされており、この分野での「一里塚」たりうる成果であり、さらにこれからオリンピック開催に関わる人々が必ず参照すべき成果であると言える。